

本の紹介

吉村智博著『かくれスポット大阪』

今西 一

(大阪大学招へい教授・小樽商科大学名誉教授)

私はここ五、六年前からロシア極東、韓国、中国、台湾など、東アジアの各国を訪れる機会が、特に多くなった。そこで確実に言えることは、日本を含めて各国とも、貧富の所得格差が、戦後最大になってきているということである。日本でも六〇年代以降の高度経済成長は、もちろんエネルギー政策の転換などによって新しい「貧困層」を創りだしていった側面はあったが、全体として八〇年代まで所得格差は縮まっていた。ところが、九〇年代のグローバリゼーション以降、急速に所得格差は拡大し、戦後最大になっている。グローバリゼーションは、「新しい植民地主義」だと喝破した西川長夫氏の遺言は当たっている(『植民地主義の時代を生きて』平凡社、二〇一三年)。

だが最近の台湾の中国との「サービス貿易協定」に反対する学生デモなど、世界中で反グローバリゼーションの運動は広がっていくだろう。

日本でも、卑近な例をあげれば、世間では「英語教育」が盛んに言われ、大学でもやたら「英語コース」が創られ、新しい教員の募集には「英語で授業ができること」という但し書きが付けられるようになってきている。しかし近年、NTTの国際電話をかけても、交換手に「どこにいるのか?」と聞けば、「インドのニューデリーです」という答えが返ってくる状態である。インドの平均賃金は現在でも五万円を切っている。しかも彼女らはネイティブな英語を話し、教育水準も高い。日本の若者がいくら高いスキル(技術)を身につけても、周縁諸国の安い労働力との競争を激化させれば、日本の若者の「ワーキング・プア」状態が改善されるとは思えない。それより「非正規雇用」を減らし、若者が働きやすい社会をつくるのが、急務であると考えている。

昨年五月、私たちは著者の吉村氏に頼んで、大阪の釜ヶ崎や、飛田遊郭を案内してもらった。釜ヶ崎のあいりん労働福祉センターの実態や、年金手帳を取り上げている高齢者の旅館、飛田の公然たる売買春街などを、実に手際よく説明してくれた。その時に、本書を出す予定だと聞いて心待ちにしていたが、やはり力作であった。小さな本であるが、著者の二〇年以上のフィールドワークが凝縮した好著である。著者には、既に『釜ヶ崎のススメ』(洛北出版、二〇一一年)、『近代大阪の部落と寄せ場』(大阪市立大学の博士論文、明石書店、二〇一二年)などの業績があり、その成果が本書に盛り込まれている。まず小さい大著の内容を見ておこう。

一、本書の内容

まず著者は、「序論」「絵図にみる被差別民の世界を歩く」として、歴史研究における「絵図(古地図)」「研究の重要性を説く。例えば「渡辺村(摂津役人村)」の数度にわたる移転問題についても、本村との関係(渡辺村道など)、大坂市中との距離、河川や地面の配置、村内の景観などは絵図の解説なくしては可視化されえない問題ばかりである」とする。

しかし、半世紀前に某百貨店で「穢多村」と書かれた絵図が販売され、部落解放運動の糾弾を受け、事件から、絵図の公開は、部落

差別を助長するものだとして認識されるようになった。その結果、所蔵者が「隠蔽」したり、「被差別身分記載の部分を「抹消」したりする」という対応が取られたが、幸いにも絵図を利用した差別事件というものは起こっていない。むしろ近年の歴史学では、絵図研究が盛んになり、「絵図を積極的に利用しよう」という見解が多く出されている。

近世には、慶長、正保、元禄、天保などの国絵図が公儀(幕府)によって作られた。「一八七〇(明治三)年には国絵図改訂の通知が民部省から出され、地図の編纂は内務省地理局へと移管し、一八七三(明治六)年から数年をかけて、全国一定方式による地籍図調査がおこなわれた」。ただ本書で主として使われているのは、「版行絵図(なかでも「大坂図」)」である。

「大坂図」は、一六五五(明暦元)年から三〇年間、京都の寺町本能寺前や林吉永が作っており、一六八七(貞享四)年からは、北を上にして作者名(絵師名)を明記するようになる。そして一七八九(寛政元)年からは「播磨屋」を屋号とする版元が「大坂図」のほとんどを仕切るようになる。

また近年、「絵図を公開し、差別問題、とくに部落問題の視点か

らとらえ返す作業は、これまでも積極的に取り組まれ」ていたが、「差別問題の歴史的研究は図像資料の利用なくしてはもはや成立しえない」ところまでできていると著者は断言する。これは、「身分制一般や被差別の側面だけに問題を収斂させてしまうのではなく、都市空間や村落共同体における部落の実像についての究明」が必要になってきているからである。「地域社会における差別問題の究明にとって、絵図の利用は必要不可欠」になってきている。

第一部の「エリア編」「道頓堀」で著者は、まず宮本輝の小説『道頓堀川』の引用からはじめるが、著者の幼年時代（一九七〇年代）の道頓堀は、「場末」の雰囲気のする空間であった。道頓堀は、江戸時代初期に東横堀川と木津川を東西につなぐために、成安（安井）道頓ら四人が開削したことで知られている。そこに「道頓堀八丁」として、九左衛門丁、吉左衛門丁、宗右衛門丁、九郎右衛門丁、太左衛門丁、立慶丁、御前丁、湊丁が、今でもこの界限を代表する地名として残っている。

禁止され、若衆歌舞伎がとって替わり、その後、若衆歌舞伎も承応元（一六五二）年頃から禁止され、野郎歌舞伎として再興する。歌舞伎興行が盛んだった、延宝（元禄期（一六七三〜一七〇四年））にかけて、道頓堀の南側に芝居小屋が建ち並び、北側には芝居茶屋が軒を連ねた。ここでは「中の芝居」「角の芝居」「大西の芝居」などで大芝居が演じられたが、近代以降の「角座」「中座」「朝日座」「戎座」「弁天座」などの人気橋に引き継がれた。一九二〇年代になると、かつての芝居小屋が松竹によって一手に買収される。道頓堀の芝居小屋で映画、演劇、歌舞伎などの幅広い興業が行われる。

「千日前」千日前という地名が、有名な法善寺（寛永一四（一六三七）年創建）の千日回向からとられたことは、意外と知られていない。ここには、竹林寺という「慶安二（一六四九）年に創建され、江戸時代に「四カ所」のうち道頓堀、天王寺、鳶田の三つの「長吏」（非人）の旦那寺になっていた寺院」もある。千日回向で人を集めていたが、二〇〇九年に天王寺区の勝山に移転した。また自安寺というかつての刑場に隣接した寺もある。絵図や案内書には、「墓所」のほか、さきにもふれた「長吏」や、墓所の管理をする「三味聖」（隠亡）なども記されている。

『摂陽落穂集』（一八〇八年）によると、「例年七月十五日夜」、「七墓めぐり」といって、「お墓めぐりのツアアがあった」。七墓は近代になると市中から排除され、阿倍野、岩崎新田、長柄へ移転・統合された。ちなみに一八七三（明治六）年には太政官によって火葬が禁止され、隠亡は収入の道を絶たれた。七五年には、火葬が再度許可されるが、その時に請け負ったのは、のちに八弘社という葬儀会社をつくる西澤新右衛門ら八人で、三味聖とは縁もゆかりもない人びとであった。道頓堀の三味聖は、六つの坊舎に住んで、それぞれ婚姻関係や縁組みを結んでいた。一方、「長吏」は、いわゆる非人頭のこと、悲田院（天王寺）、鳶田、道頓堀、天満の四カ所の非人村（垣外）で生活しており、その下に小頭があり、一般構成員にあたる若キ者、その配下の弟子といった序列があった。仲間内のことは「惣仲間作法」を作って執行し、垣内外の問題は高原会所で相談して行っていたが、その「御用」を悪用して「悪ねだり」する者もいた。

近代になって、ミナミが歓楽街になって、千日前は一時期衰退するが、楽天地、芦辺劇場、千日倶楽部などが所狭しと軒をならべるようになる。一九二〇年代初頭になると、さらに南下して劇場街が形成され、弥生座、敷島倶楽部、南浜舞場などが林立し、一九三〇年代には、大阪劇場が開演して、大阪松竹歌劇団の公演、歌手や映画俳優の実演などが自慢であったが、一九九一年に再開発のために取り壊された。

「日本橋筋」日本橋は、江戸時代の公儀橋（幕府直轄の橋）のひとつで、紀州街道の交通の要衝であった。橋の南詰は立慶町と称されていた。その辻以南は長町と呼ばれていた。すべて長町の名を冠して、新助町、甚左衛門町、嘉右衛門町、毛皮屋町、谷町、笠屋町などがあり、南端が長町筋茂助町となっていた。これらの町が元禄六（一六九三）年には長町一〜九丁目となり、寛政四（一七九二）年には一〜五丁目、日本橋一〜五丁目と改称された。それ以南の長町六〜九丁目（のちに三〜五丁目）には、旅人宿（旅籠）、木賃宿などが軒を連ね、「江戸時代中後期から明治時代にかけては窮民や貧民が多数生活の拠点とした」。かつての町名を引き継いで「長町」（名護町、名呉町）と通称され、スラムとして名を馳せた。

日本橋筋を西に入ると、そこはかつて関谷町と呼ばれていた地域である。ここも江戸時代からの木賃宿が軒を連ねていたが、東関谷町には、「五階跡南裏」など、裏通りや路地に裏長屋が密集していた。大阪市や内務省の社会調査などでは、広田町とともにたびたび登場し、明治時代の新聞には「蜘蛛巣」などと揶揄されている。東関谷町のことを、「六道ヶ辻」と記した「細民調査」もある。

日本橋から南の紀州街道は、かつて「窮民」や「貧民」と呼ばれた人びとの生活拠点であった。江戸時代後期からたびたび取り締まりの対象になるが、特に一八九一年のスラム・クリアランスによって、長町の人びとはその周辺の東関谷町、広田町、下寺町、日東町へと移住する。「旧市中のスラム・クリアランスとその影響による周辺地域のスラム化」が、大阪環状線の内側と外側で分節された」のが、大阪の都市形成の特色である。

今のようなシャッターもなければ、監視カメラも載っていないかった。このセンターには、あいりん労働公共職業安定所がおかれているが、同所は普通のハローワークのように仕事を「紹介」しない。ここでは最高一日七五〇〇円の「失業（アブレ）手当」の支給をするだけである。仕事の「斡旋」は、同センターの「（公財）西成労働福祉センター」がやっている。ここは、一九六一年八月の起こったいわゆる「釜ヶ崎暴動」（「異議申し立て」）の翌月から開設された。

そもそも釜ヶ崎は、一九〇〇年代初頭は、「職工」と呼ばれる工場労働者の街であった。特に「電光社（舎）」とよばれるマッチ工場が建っていた。ところが大阪市内のスラム・クリアランスが本格化すると、木賃宿としての営業許可を取っていた釜ヶ崎に、多くの日雇い労働者が集まるようになった。そして大阪毎日新聞の記者村島婦之らは、「飛田界限は不具者と乞巧と盗人と怠け者の巢窟である」（『ドン底生活』一九一七年）という放ち、「貧民」「細民」という「社会の眼差」が、一九二〇年代の大阪の「市民社会」の形成のなかで生まれてきた。

た第五回内国勸業博覧会は、実に五三〇万人もの人出があった。この博覧会には、海外植民地である台湾も参加させ、台湾、アイヌ、沖縄などの人びとを「展示」する「人類館事件」も起こしている。その跡地に、「ルナパーク」が開園し、通天閣が建てられたのは、一九一二年（大正元年）であった。現在の通天閣は、戦時下の鉄の供給で解体された後、地域の熱い要望で一九五六年に再建されたものである。

一九二五（大正一四）年に大阪市は、一八九七（明治三〇）年に続く第二次市域拡張を行った。その結果、「大大阪」（人口二二万人）となった大阪市は、大阪毎日新聞社の主催する「大大阪記念博覧会」を天王寺公園と大阪城で開催した。入場者数は約一八九万人を数えた。しかし、天王寺公園の北側には、スラムがひろがっており、特に日本橋筋の界限には、通称「八十軒長屋」のほか長屋が軒を連ねていた。一九二七年に不良住宅地区改良法が施行され、大阪市はクリアランスを行った。地域の共同体関係も破壊されている。

また通天閣の一角は、その名称で全国に名を馳せているが、その一角は南陽通商店街（ジャンジャン横丁）で、西成区の「飛田新地

（遊廓）に通じる繁華街として、大手の大阪土地建物会社によって開発された。

飛田新地は、近代になって開業した松島遊廓とならんで、「二大本廓」と呼ばれた「事実上の遊廓」で、一九一八年に「貸座敷」として開業した。当時、買春をめぐっては、基督教婦人矯風会の流れを組んだ飛田遊廓反対同盟会と、開発をすすめる大阪土地建物会社との激しい対立はあったが、大阪府はこの時とばかりに、新世界の「私娼」を取り締まり、飛田に「公娼」を設置した。

「百済・平野」古代の百済滅亡の「渡来人」伝説のある百済駅から童田越奈良街道に沿って進むと、平野郷町に出る。かつては環濠集落であり、平野部落もある。平野部落は、寛文九（一六六九）年の史料に「川原者」と記載されており、杭全神社の大祭で神輿の「さきばらい」などの清掃をしていたと伝えられている。部落の生業は、「皮革」「雪駄」などであったが、明治以降には石鹼工場や精麦工場などができて働いていたが、平野紡績工場では雇われなかった。

「北浜・太融寺」ここは大阪の自由民権運動の遺跡が多い。一八八二（明治一五）年七月、西浜部落の豪商山下茂十郎は自由党を結成

する。続いて九月に、近畿平権興道社が結成され、士族茂中達らによって平権党も作られる。この党は「博徒」が「過半」を占めていたと言われている。

同年九月、松木正守らによって、大阪自由党が結成され、八七年まで、計八回の自由平権懇親会が開催された。ここでは、「新平民」から「車夫」まで組織されている。しかし、その中心は、「社会的地位の向上」を望む豪農・豪商であった。

民権運動の中心となる新聞も、一八七五（明治八）年に東区安堂寺町（現中央区平野町）で『大阪日報』が刊行される。同紙に小室信介や古沢滋らが参加し、八一年からは中島信行を社長として『日本立憲政新聞』となる。民権運動には豪商たちも手を貸し、七八年の愛国社再興第一回大会は、鴻池駒次郎の別邸で行われている。また大阪で最も古い愛珠幼稚園は、三井糸店出身の市会議員豊田文三と、民権家たちによって作られ（一八八〇年開園）、それを支えたのが船場の商人たちであった。

その北浜から中之島を經由して北に向かうと、太融寺がある。ここで一八八〇（明治一三）年、二府二二県の代表一一人が集まって、国会期成同盟の結成大会が行われ

たことは有名である。

「天神橋筋」天満には、大坂町奉行所の役人の屋敷があった。同心たちの業務は多忙で、その手下には、「垣外」の「非人」が抱えられていた。そのひとつに「天満垣外」があつて、与力町・同心の北側にあつた。天満垣外は、西成郡川崎村の管轄下にあつて、一八七二（明治五）年に競売にあい、落札されて大川沿いにあつた青物市場が移転してきた。現在は天満市場の新しいビルが建っている。

また天六近在は本庄・長柄のラム街や木賃宿（簡易宿）街があり、大阪市の社会福祉事業の拠点と位置づけられている。米騒動の後、大阪府は方面委員制度を、大阪市は市民館などを創設した。市民館では、法律、金融、生業などの相談に応じている。

「舟場・北野」大阪も小学校の統廃合が進んでいるが、北野では戦前から在日朝鮮人の夜間学級が開かれていた。済美第五尋常高等学校が有名である。この地域は、方面委員制度の発祥の地であり、済生会病院の最初である本庄診療所が、一九一四年に開設した。済生会医療は、方面委員などを通じて、治療を必要とする人びとに「治療券」を公布して、貧富にかかわらず治療するものであった。

「中津」中津で有名なのは、

「淀川改良」の治水事業である。一九世紀の末に九〇九万円をかけて行われた大工事である。新淀川の改修工事によって、中津村では七割以上の住民が移住した。ここでは、部落の移転も行われ、後の奈良県の洞村移転のモデルとされた。

「京橋・大阪城公園」一九四五年八月一四日の大阪大空襲で壊滅した大阪砲兵工廠跡地には、鉄のスクラップを持ち出す、マスコミから「アパッチ族」と呼ばれた人びとの集落があつた。大阪城に軍需施設が集まったのは、日清戦争を境としてであり、衛戍病院（陸軍病院）、輜重兵営、陸軍地方幼年学校などがあいついで建設された。

現在の大阪城公園には、「大阪城内の「友の会」というホームレスの自主組織がある。著書は、大阪市が全国で飛び抜けて生活保護率が高いことが喧伝されているが、これは「大阪は歴史的にも現状としても社会福祉の最先端をいく都市」だと締めくくっている。

著者の該博な知識の一部しか紹介できなかつたが、実に豊富な話を書いていたので、是非、本書を一読していただきたい。他にも、「なにわ人物伝」として、久保田権四郎、鳥井信治郎、高倉藤平、

石井十次、沼田嘉一郎、新田長次郎らを、社会事業の側面から紹介している。そして、「食肉文化と屠場」「有隣小学校と徳風小学校」「四カ所と七墓」「皮革業と銀行」「なにわの塔物語」といった「トピックス編」があり、最後に補論として、「『大大阪』と被差別民」がついている。

二 本書の論点

すべての問題に触れる紙幅も力量もないので、絵図と著者の近代「被差別民」論についてだけ感想を書きたい。絵図と「近代的」地図の關係については、前から気になっていた点で、絵図には「穢多」「隠亡」などの身分標識が書かれている。丹後の絵図には、「鉢」という中世の系譜を引く「雑賤民」の記載が貼り付けてあるものもある（拙著『近代日本の差別と村落』雄山閣、一九九三年、四三頁）。

本来近代的な地図のうえには、身分呼称は残らないはずである。日本では、周知のように寛政一二（一八〇〇）年から文化二三（一八一六）年にかけて伊能忠敬が作った「大日本沿海輿地全図」があり、一八七七年に出された文部省の「日本全図」から八四年に陸軍参謀本部測量部が作成した「輯製二〇万分の一図」まで、すべて伊能

の大図、小図が基になっている。著者の言っている地租改正の時の「地籍図」は、耕宅地の測量を行ったもので、地域の全体を知るものではない。しかも地租改正では、三角測量法は使われておらず、三角測量による日本地図が完成するのは、一九一三年である（織田武雄『地図の歴史 日本篇』講談社、一九七四年、他）。これは近代地図の登場が遅いと見るのか、伊能図のレベルが高かったと見るのか、評価の分かれる所である。地図の歴史の評価はあるにせよ、絵図の身分表記については、いつまで続くのかなど興味深い問題がある。

著者は、補論「『大大阪』と被差別民」のなかで、実に興味深い「被差別民」論を展開している。

大阪三郷（天満組・北組・南組）と称された時代から、武士らが居住する天満、寺院が集住する上町、表店・裏店を仕切る船場・西船場・島之内・堀江といった中心地域の周縁に被差別民が居住していた。穢多、非人、隠亡などは、身分ごと三郷の接続村に組み込まれ、市中（オールドシティ）が形成されていた。

近世のオールドシティが身分制の解体によって、近代都市へと変貌する過程で、周縁部にインナーシティが形成される。その主なも

のは、墓場、塵芥処理場、屠場、避病院や監獄などの隔離・収容施設、遊廓・貸座敷などの遊興施設であり、旧市中の外縁部に布置されていった。近代市民社会では必要不可欠しながら「賤視の対象」となった。これらは、一九一九年の「都市計画法」の施行前から移転・統廃合の対象となった。ここには、「身分制社会における都市の周縁化の系譜を継承しつつ、排除と包摂の帰結として」、被差別部落・寄せ場・スラムに近接するか、あるいは内部に重層的に組み込まれた。このようなインナーリングの延長線上に一九二五年の第二次市域編入が行われ、『大大阪』の「もうひとつの顔」として、差別が刻印される。

その具体例として、ディープ・サウス（深淵なる南部）といわれる釜ヶ崎の日雇い労働者、西浜・西成の皮革業、アトラクティブ・ノース（魅力的な北）といわれる長柄・本庄の簡易宿街、舟場の履物修繕業などが、紹介される。

そして最後に、小河滋次郎が一九一三年に結成した救済事業研究会が紹介される。特に著者は大阪の市民館、方面委員制度、私立夜間学校、済生会、改良住宅などの都市公共事業の先駆性を強調する。これは、こうした都市の公共性を

切り捨てる、今日の橋下市政などの「新自由主義」政策への著者の批判と読むのは、私の思い込み過剰であろうか。

本書は、最初に書いたように、一般向けのガイド・ブックとして書かれたものとしては、実に良心的で良質なものである。これに理論的な批判を加えるのは、野暮であることを知りつつ、評者の責任から二、三の注文をつけておくことにする。

長年京都の研究をしてきた私から見ると、大阪は飛田などの遊廓でも、圧倒的に近代社会が創ったものが多い。飛田などは、近代遊廓と言ってもいいもので、京都の島原や祇園などとは大きく異なる。

この伝統的遊廓と近代遊廓の断絶の問題は、もっと考えられてもいいのではないだろうか。しかも近世でも、穢多、非人、遊廓、役者街など「悪所」の周縁化はあり、これと近代のクリアランスが、どう繋がり、繋がらないのか、もう少し知りたいところである。

それは釜ヶ崎などのスラム街にも言えることで、近代的労働者の街から日雇い労働者の街に変わるの、日清戦後からの人の移動の問題があり、周辺農村からの労働力の移動という前提があったからである。ここでは周辺の農村の解

体と大大阪の膨張という問題も、視野に入れる必要があるのではないだろうか。

この労働力の移動という問題を考える時には、著者の関心が、部落問題から来ていることもあって、「オールドカマー」や「ニューカマー」である沖繩や朝鮮人、中国人、台湾人などの問題が入らないのは残念である。著者は、最初から「独自のガイドブック」がある生野区などを避けると書いているが、国内外の植民地からの人の移動の問題は、大大阪だけでなく、近現代都市論や「差別の重層性」を考える時、避けられない問題だと考えている。これは、今までの「部落史」研究の問題点であるとも考えている。

最後の「公共性」の評価も、方面委員などの先駆性はわかるが、これが支配の道具として機能したことは、著者は十分知っているはずである。この小著に書き込むのは難しいだろうが、「公共性」の機能を手放して評価できないことも附言する必要があるだろう。

小さな大作に、勝手な注文をつけたが、今後、著者に教えてもらいながら、一緒に考えていきたい問題でもある。妄言多謝。

（解放出版社、二〇一三年一月五日、一三〇〇円＋税）